

頓野私立山口測候所 頓野キヨ・田邊タミ

— 最初の女性会員をたずねて —

山 本 哲*

1. はじめに

天気現象と高層気象との関連を探究するため、世界的に高山における気象観測への期待が高まっていた19世紀末、我が国でも富士山頂での通年気象観測の可能性を実証するため、1895（明治28）年冬季越冬気象観測に野中 到（1867～1955）とその妻・野中千代子（1871～1923）が挑んだ（土器屋 2018）。その千代子が「気象学会員だったか？」という土器屋氏の問題提起に対する山本（2018）の答は「最初の女性会員ではなかった」であった。次なる問は「では最初の女性会員は？」ということになるが、これに対する答を著者はまだ得ていない。

ここでは野中千代子入会（早くとも1895（明治28）年10月以降）より前の、1894（明治27）年12月現在の『大日本気象學會々員録』（以下『會員録』と記す。）に記載のある2名の女性、頓野キヨと田邊タミを紹介する。著者がこれまでに見出した資料の範囲で確認される、最初の女性会員である。

2. 頓野私立山口測候所

『會員録』には頓野キヨ・田邊タミの2名とも「山口縣頓野私立山口測候所」と記されている。ここで、この測候所について簡単に説明しておく必要があるだろう。

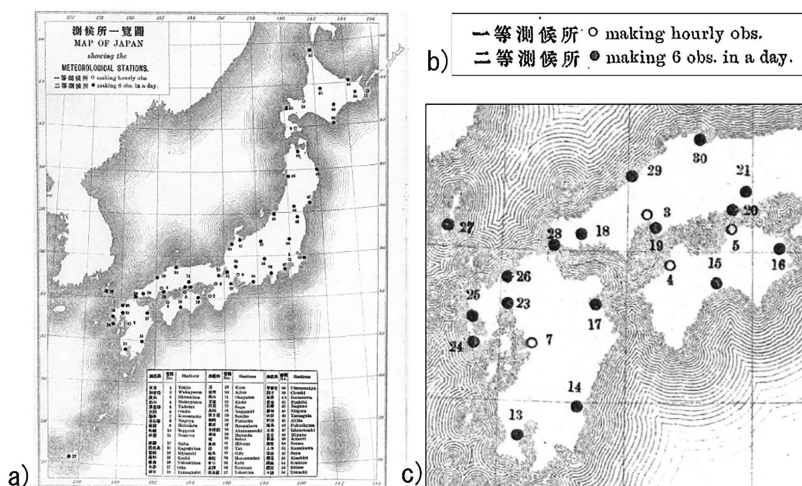
頓野私立山口測候所は当時山口中学校兼高等学校教諭であり「日本第一ノ」「氣象熱心家」として気象界のみならず「世人皆ナ之ヲ知ル」（大日本気象學會 1892a）存在であった頓野廣太郎（1859～1892）に

よって設立された（和田 1892）。1892（明治25）年1月に内務省の許可を受けた公式の測候所として告示された（明治25年1月13日内閣府告示第3号・官報第2558号）が、観測は1888（明治21）年に開始、当初から観測資料は中央气象台に報告され、遅くとも1890（明治23）年には測候所として認知されていたことが気象庁保存資料や官報等刊行物の記載からうかがえる。当時は多くの測候所は県営であったが、伏木（1884（明治17）年、伏木の廻船問屋に生まれた実業家藤井能三らにより設立）、銚子（1886（明治19）年、銚子港民有志により設立）を始めとして私立として設立された測候所も少なからずあり、国営、県営、私立とも国家気象観測網をなす測候所として同等に扱われていた（第1図）。これら地方測候所がすべて国営移管・中央气象台直轄となるのは戦時体制が敷かれた1938・1939（昭和13・14）年度であり、この体制が戦後今日まで維持されることになる（気象庁 1975）。

測候所の詳細な位置は明らかになっていないが、気象庁に保存されている1889（明治22）年の気象月報等の画像では観測所名として「山口高等中学校」と記載されており、当時の山口高等中学校の敷地図に「氣象試験室」と記された施設が見られる（「山口高等中学校敷地建物畧圖」。「会議原書（明治22年分）」および『山口高等中学校一覧自明治22年至明治23年』（いずれも山口大学所蔵）所収。前者は山口大学図書館（2013）掲載）ことなどから、1888（明治21）年の開始当初は山口県吉敷郡上宇野令村（現在の山口市）の同校構内で観測が行われたと考えられる。その後、1891（明治24）年初までには学校正門前の自宅に測候所施設を併設し移転したと考えられ、岡本（1892）が訪問を報告している。さらに気象報告の測器設置高の変化から1893（明治26）年7月頃に移転したことがう

* Akira YAMAMOTO, 気象研究所（現所属：気象庁、〒100-8122 東京都千代田区大手町1-3-4）。

© 2019 日本気象学会



第1図 1895(明治28)年測候所一覧図(a), 凡例(b)と西日本(c)の拡大(中央気象台 1897, 気象庁図書館所蔵)。cの範囲に含まれる21地点は、海軍省所管(19: 呉, 25: 佐世保), 私立(18: 山口, 20: 味野)それぞれ2地点の他はすべて県営であり、中央気象台所管の測候所は無い(全国56地点でも東京のみ)。これら測候所は所管に関わらず、図や本文の記載でも特段の区別なく扱われている。山口は二等測候所となっている。味野測候所は製塩業・貴族院議員の野崎武吉郎(1848~1925)により1894(明治27)年に設置、1928(昭和3)年末をもって廃止された(気象庁 1975)。

かがえる(緯度・経度は分単位の記述で変化していない)。1894(明治27)年夏に訪問した栗田(1895)の報告によると、学校と同じ上宇野令村内に所在する測候所専用の施設と見受けられる。なお、山口高等学校の敷地はその後変遷を経て山口大学に引き継がれたが同大学は1973年移転して現在は亀山公園の一部となり、山口県立山口図書館・県立美術館などが所在している(「山口大学の来た道」編集委員会 2014)。

頼野私立山口測候所は私立ではあったが、1892(明治25)年度から1897(明治30)年度までは山口県から委託費、気候調査費等の名目で多額の予算が支出されており、数百円という額は同県赤間関測候所(現・下関地方気象台)の予算額に匹敵するものであった(田辺 1973)。これには県の書記官(知事に次ぐ地位)であった頼野廣太郎の義父の寄与も示唆されるが、想像の域を出ない。義父については次節で述べる。

私立測候所の中には伏木、銚子のように県に移管され、今日まで観測が継続している例もあるが、頼野私立山口測候所の観測は長くは続かなかった。同測候所は1898(明治31)年1月限りで廃止され、山口県の気候調査は赤間関測候所に移管された(中央気象台

1898)。その後、山口市に再び測候所が設立されたのは1966(昭和41)年である。中断期間はあまりに長く、今日、山口の気象統計で頼野私立山口測候所の資料が参照されることはない。測候所設置の紹介記事(山口測候所 1967)や「山口県の気象百年史」(下関地方気象台 1983)でも頼野私立山口測候所については一言の言及もない。

頼野廣太郎(第2図a)は東京気象学会創立(1882(明治15)年5月)当時の会員38名のひとりである。(日本気象学会 1957)。気象集誌(第一輯)に10編を超える著作がある。1859(安政六)年(漢数字は旧暦の年月を示す。以下本文中同じ。)大和国に生まれ、旧姓は保田。五條師範学校・大坂英語学校・大坂専門学校に学び、1881(明治14)年9月東京大学理学部天文台掛、1883(明治15)年12月山口師範学校兼山口中学校教諭、1884(明治17)年1月富山師範学校教諭を経て1886年(明治19)年5月山口中学校兼高等学校教諭(第3図)、1890年(明治23)年10月教授となった。1887年(明治20)年山口県士族で当時山口県書記官であった頼野馬彦(1845~1896)の婿養子となり改姓し、自身も士族となる。1895年(明治28)年8月30

日中央气象台技師に任ぜられ、中央气象台長となった中村精男（1855～1930）の後任の統計課長という中央气象台幹部の地位に就いたが、1896（明治29）年9月25日論旨により依願免本官、1898（明治31）年10月24日京都で39歳で没した（和田 1892；大日本氣象學會 1898；気象庁 1975；田辺 1982；富山県立図書館所蔵「富山県史料」。これらの記述には一致しない部分もあるが著者の判断で取捨選択した。）。

話が少々脱線するが、山口高等学校教頭兼教諭・隈本有尚（1860～1943、第3図）は東京大学理学部学生だった1880（明治13）年8月、米国人教授メンデンホール（Thomas Corwin Mendenhall, 1841～1924）の引率で、他の理学部学生3名らとともに富士山での重力・気象等の地球物理学的観測を最初に行った人物である。この観測には内務省地理局（東京气象台）から中村精男（萩藩士の長男（井関 1918）、松下村塾で学び、東京大学理学部卒業）や和田雄治（1859～1918、東京大学理学部卒業、大日本気象学会幹事長・朝鮮総督府観測所長、野中 到（第一高等学校中退）の理解者・後援者として知られる）も参加した（Mendenhall 1881a, b）。1881（明治14）年から1882（明治15）年まで理学部天文台掛に就いた頓野廣太郎もまたその履歴（「小学教員講習所教員履歴書之義二付開申」（1884（明治17）年7月9日）「富山県史料」（マイクロフィルム複製版・富山県立図書館所蔵、原本国立公文書館内閣文庫所蔵）に「メンデンホール」

ニ就キ理学ヲ専修ス」と記している（カタカナ交じり文の中で外来語にかぎ括弧を付した記法である）。

さらに頓野（保田）は1887（明治20）年の皆既日食における栃木県黒磯の理科大学（後の東京大学理学部）教授・寺尾 寿（1855～1923、天文学者、東京天文台初代台長、日本天文学会初代会長。）を団長とする文部省の観測隊に加わり気象観測を行っている（和田 1892；斎藤・篠沢 1969）が、寺尾は野中 到と同郷（福岡県）の先輩であり、富士山頂観測所設置の意思を固めた野中を和田雄治に紹介することになる（野中 至「富士観象台建設事業に関する略歴」（「到」が戸籍名だが原典表記は「至」、詳細は山本（2018）参照）、野中千代子「芙蓉日記」（大森 2006）。この時代、气象台組織の内外で気象学に関わる人脈ができつつあった。

頓野廣太郎は、野中 到と同様の高山気象観測の先駆者的諸活動（和田 1892）、我が国最初の気象学論争といわれる梅雨論争（日本地学史編纂委員会・東京地学協会 1998）などの気象分野をはじめ、私立富山英語学校（英語「で」授業を行う学校であり、当時高等教育機関への唯一の入口であった大学予備門（後の東京大学教養学部）への予備校的性格を持っていた）の設立、地震学・物理学などの教科書執筆など教育分野（竹田 2007）などでも多彩な活動が指摘され、柳川（1984）は「鬼才」とまで称した興味深い人物であるが、本稿ではこれ以上言及しないことにする。



第2図 (a) 頓野廣太郎（山口大学図書館所蔵）。1893（明治26）年7月撮影。(b) 頓野キヨ（神戸小學校開校三十年記念祝典會 1915・筑波大学附属図書館所蔵）。神戸幼稚園園長就任時（1903（明治36）年）頃の撮影と思われる。



第3図 山口高等学校教師と第1回予科卒業生。明治22年7月撮影。（山口大学図書館所蔵）。『文部省職員録』（文部省 1890）と照合すると校長以下教頭・教諭等教師ほぼ全員が写っていると思われる。後列右から4人目が頓野廣太郎、その左隣が校長・河内信朝、その隣が教頭兼教諭・隈本有尚。

頓野廣太郎とその測候所についての説明がいささか長くなってしまった。以後本篇の主題である2人について見ていく。しかし彼女らについて得られる情報は頓野廣太郎に比べはるかに少ない。

3. 頓野キヨ（きよ）（1865頃～1906）

頓野キヨ（第2図b）は名前から想像されるとおり、頓野廣太郎の妻である。すなわち頓野馬彦の娘ということになる。

キヨの父、頓野馬彦は萩藩士で、書に長け漢籍に深い造詣があったと伝えられる。萩藩（長州藩、毛利藩）は士族のみならず一般庶民の子弟の教育も重視し、そのため郷校を各地に置いた。馬彦は周防大島の久賀（現在の山口県大島郡周防大島町久賀）に置かれた「学而塾」の塾長を幕末藩命で務め、中流以上の子弟に漢籍を教授したとされる。ただし「藩政時代の教育に関しては固より徹すべき文献もなく、只口碑によりて傳はるのみで詳述することは不可能である」（久賀小学校 1952）とされ、馬彦が久賀に滞在した具体的な期間を示す史料は今日確認されない。久賀は当時萩藩が奨励した職人による手工業と交易の発展で隆盛をきわめた。「幕長戦争（幕府側からは「長州征伐」、萩藩側からは「四境の役」などと呼ばれる）」では1866（慶応二）年幕軍の攻撃を受け、久賀の町は焦土と化した（久賀町誌編集委員会 1954, 末弘 1967）。維新後1872年11月（明治五年十月）、学制公布のわずか1か月後に久賀では大島郡内で最初の小学校として津原小学校が創立されるが、その校舎は学而塾のものが充用されたとされる（久賀小学校 1952）。これは戦災後いち早く学而塾が再建されていたことを意味する。梶田（1935）は馬彦について、「氏は明治初年暫く大島郡久賀村に村塾を開き大島郡子弟の薫陶に従事せられ」と述べる（土井 1957；児玉 1992）。津原小学校の後身となる久賀小学校では旧職員・先輩の遺徳を偲ぶ「先賢祭」が昭和戦前期に行われ、馬彦の名はその「先賢尊名録」の冒頭を飾る（久賀小学校百年史編集委員会 1978）。1884（明治17）年の馬彦の「履歴」（昇任稟議（「明治17年公文録10月～12月官吏進退（内務省）」（国立公文書館デジタルアーカイブ）添付。以下「履歴」と表記する。）は「山口縣周防國大島郡久賀村居住士族」と記す。これらの史料・著述は、馬彦が明治維新後も久賀の教育に重要な役割を果たしたことを強く示唆する。

馬彦の動静について明確な史料が見出されるのは、

1873（明治6）年以降である。この年、青森県に任官（「履歴」,「青森縣史料 青森縣歴史附録官員履歴」（国立公文書館デジタルアーカイブ）, 1874（明治7）年秋田県に任官、学務課長を務め県師範学校長（現在の秋田県立秋田高等学校）等も兼務した（「履歴」,「秋田縣史料 秋田縣史稿附録官員履歴」（国立公文書館デジタルアーカイブ）, 1883（明治16）年山口県学務課長に迎えられる。これは当時政府要職にあった長州閥有力者たちが山口県の教育振興のため県首脳部にそのための人材を得ようとした運動の一環とされる（海原 1965；永添 2006）。地元に戻った馬彦は行政的手腕をも発揮して1886（明治19年）からは県書記官を1893（明治26）年まで務め（山口縣教育會 1925）、名望は時の知事の上にあったといわれる（久賀町誌編集委員会 1954）。

キヨは1887（明治20）年4月高等師範学校小学師範学科（東京・女子部）を卒業した（女子高等師範学校 1906）（第4図）。高等師範学校女子部は当時我が国唯一の女子高等教育機関であり、1890（明治23）年に分離されて「女子高等師範学校」が創設され現在のお茶の水女子大学の前身となった（「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会 1984）。キヨの生年は不詳であるが、同校卒業年次から1865年頃であろうと推定される。高等師範学校入学までの経歴も不明であるが、父馬彦が娘キヨと起居を共にしていたとすれば、キヨは「町衆文化」の花開いた瀬戸内の港町に生まれ、幕末の戦火をくぐり、東北で青春時代を過ごしたことになる。幕末・明治初年を通じて町の教育に尽くし、さらに有能な地方官吏として教育行政に携わった父に育てられ、当時女性にとっての最高学府への進学を果たす。高等師範学校卒業後ただちに1887（明治20）年4月15日山口県尋常師範学校訓導に任官、学科は家政・音楽を受け持ち、1895（明治28）年3月29日に退職するまで勤めた（山口県尋常師範学校 1890, 1895）。

前述の通り、内務省（中央气象台）には頓野私立山口測候所の気象観測資料が報告されており、現在気象庁には頓野私立山口測候所の毎月の気象報告の画像が、若干の抜けはあるが1889（明治22）年1月から1897（明治30）年11月まで保存されている。これらには月毎に観測者名も記載されている（第5図）。頓野キヨの名は1892（明治25）年1月から1896（明治29）年1月まで和文表記（「頓野きよ」/「頓野キヨ」）や英文表記（“K. Tonno”, “Mrs. Tonno”）で掲載されている。廣太郎との婚姻は1887（明治20）年と考えられ

るが、観測者としての最初の記録は5年近く経過している。気象集誌（第一輯）に掲載された「貴夫人ノ観測者」（大日本気象學會 1892b）なる無記名記事は「山口ノ頼野教授令夫人きよ子ハ常ニ教授ヲ助ケテ観測及計算ニ従事シ居ラルハト謂フ恐ク本邦ニ於テ氣象観測ヲ為シタル婦人ハ頼野令夫人ヲ除テ他ニ非サルヘシ」と、キヨが当時我が国唯一の女性気象観測者であると述べる（ここでの「子」は敬称として用いられているようだ）。前述のとおり1894（明治27）年夏に頼野私立山口測候所を訪問した栗田（1895）は、「山口測候所は…令閨之を監理せり」と報告している。キヨは本務の尋常師範学校の傍ら、測候所においては観測者としてだけでなく、その運営で重要な役割を果たしていたのではないかと想像される。

廣太郎の中央気象台任官の1895（明治28）年8月の報告以降、廣太郎の名は観測所長としてのみ記され、観測者としては記録されなくなるが、キヨの名は1896（明治29）年1月まで観測者として記録されている。3年前の1893（明治26）年に山口県書記官を退官

した馬彦がこの月1月19日に50歳で逝去している（田中 1970）。以後、1898（明治31）年1月に測候所が廃止されるまでの2年間、観測者として廣太郎の名が1897（明治30）年1、2月に見られるが、キヨの名は無い（ただし1897（明治30）年4月および12月以降の記録は残されていない。）。この間1896（明治29）年9月に廣太郎は中央気象台を免官となった。1898（明治31）年10月廣太郎の逝去は測候所廃止後1年足らずの

Figure 5 consists of three parts labeled (a), (b), and (c). Part (a) is the title page of the 'Hourly Meteorological Observation Report' from the 'Ryōno Private Yamaguchi Station' (山口私立山口測候所) for June 6, 1895. It includes the station name in Japanese and English, and the date. Part (b) is a list of observers in Japanese, showing the names of the station head and several observers. Part (c) is the same list of observers in English, with names like H. TOMINO, S. SATAKE, H. MIYAKI, K. TONNO, and J. TANABE.

第5図 1895（明治28）年6月山口毎時気象観測報告（頼野私立山口壹等測候所（注））表紙（気象庁）（部分拡大）。(a) 年月・官署名、(b) 観測所長・観測者名（和文）(c) 同（英文）。手書きの筆記者は不明である。測候所共通の定型様式（詳細不明）の観測者名欄が足りず1名分欄を書き足している。田邊の名の記載はこの月のものが最後となった。

（注）明治20年内務省令第1号「気象臺測候所條例施行細則」（1887（明治20）年8月10日）により、我が国の測候所は観測要素数・観測回数により一等測候所、二等測候所、三等測候所に分類された。これは1873（明治6）年の国際気象會議（ウィーン）で採択された国家気象観測組織のA Station of the First Order, Stations of the Second Order, Stations of the Third Orderにそれぞれ対応したものである（気象庁 1975）。気象庁保存資料によると、頼野私立山口測候所から一等測候所と同等の観測回数（1日24回）の報告がされているのは1895（明治28）年のみである。同年各月の『中央気象台月報』では測候所一覧表の「山口」に一等測候所であることを示す印が付されているが、観測資料は二等測候所と同等の1日6回のもののみ掲載されており、『中央気象台年報』（中央気象台 1897）ではこの年を含めすべて二等測候所と記載されている（第1図参照）。



第4図 高等師範学校（女子部）小学師範科卒業生（1887・明治20年4月）卒業記念写真（お茶の水女子大学所蔵）。卒業生16名の氏名は女子高等師範学校（1906）などに記載されているが、写真の個々の名は特定されていない。著者は他の写真（神戸小學校開校三十年記念祝典會 1915、兵庫県幼稚園連盟 1959に掲載）との照合から、後列右から4人目を頼野、その右隣を望月と推定した。欧化主義の時期（「鹿鳴館時代」）であり、学生は1886（明治19）年10月から一般に洋服を着用することとされ、卒業記念写真も1886（明治19）年7月から1893（明治26）年3月まで洋装である（『お茶の水女子大学百年史』刊行委員会 1984）。

ことである。

ここで、上に掲げた「貴夫人ノ観測者」(大日本氣象學會 1892b)を簡単に紹介しておこう。この記事は氣象観測者の条件として「最モ貴重ナルハ叮嚀ト厳正ノ上ニ出ルハナシ」とし「二者完備セハ學職高尚ナラサルモ却テ之ニ適切ス」と観測者に必ずしも学識は求められないとし、「彼婦女子ハ其性綿密ニシテ瑣事ヲモ看過セス且從順温良ノ特質ヲ具フルモノナレハ氣象観測ノ如キ長酷ノ労働ヲ要セサル業務ニハ實ニ其恰當セルモノト謂フヘシ」と女性がその特質から観測者に適していることを説き、さらに「況ヤ貴夫人ノ如キ普通ノ學識ヲ有シ身ハ家長トシテ常ニ房室ニ静坐シ倦厭ニ堪ヘサル者ニ於テヲヤ」と学識を有した家庭夫人はまさに最適であるなどと述べ、海外の例として「香港觀象臺」(Hong Kong Observatory)の初代台長を務める「ドベルク」(William Doberck, 1852-1941, デンマーク人天文学者・氣象学者)の「令妹」で、香港最初の女性観測者となった「ドベルク令嬢」(Anna Doberck, 1858-1939以降, MacKeown 2008)などの例も引き、「夫人ヨ勉メラレヨ教授ノ名譽ノ爲メ國家ノ光輝ノ爲メ將氣象學ノ進歩ノ爲メ」と結ぶ。この記事が執筆された意図は不明であるが、この時代の性別特性論・性別役割分業意識を反映し、学問の徒である夫(男性)を支える役割があくまで期待されているようである。

『會員録』にキヨの名は1894(明治27)年12月、1896(明治29)年12月のものに掲載が認められる(1895(明治28)年のものは未見)。1896(明治29)年の『會員録』には廣太郎とともに東京の住所が記載されている。廣太郎は1897(明治30)年12月のものにも記載があるが、キヨの名前は無い。

1898(明治31)年の廣太郎の死後、1903(明治36)年までのキヨの動静は不明である。1903(明治36)年10月2日神戸市立神戸幼稚園園長に就任した(神戸小學校開校三十年記念祝典會 1915)。神戸への転任は、1902(明治35)年12月依願退職(兵庫縣教育會 1903)するまで神戸市兵庫幼稚園保母を務めた高等師範学校同級の望月クニ(1868~1955, 第4図)の寄与が示唆される。しかし病に倒れ、キヨはその能力を幼児教育の場で十分に発揮することはできなかった。1906(明治39)年3月26日病気で神戸幼稚園園長を退職(神戸小學校開校三十年記念祝典會 1915)、同年逝去した(女子高等師範學校 1906)。40歳前後であったと考えられる。死の床にあったキヨの懇請(兵庫縣幼稚園連

盟 1959)で神戸幼稚園長を継ぎ27年間務めた望月は、後に「科学的実証的な幼児教育研究の先駆者、進歩主義的幼児教育の実践者・普及者」(岡田ほか 1971)として高く評価されることになる。なお、キヨの園長就任期間と重なる1904(明治37)年9月から1906(明治39)年9月まで「頓野 貞」なる人物が神戸幼稚園に保母として就職している(神戸小學校開校三十年記念祝典會 1915)。キヨとの関係は不明である。

キヨは夫・廣太郎の氣象学的活動を支えたという点では野中千代子との共通点が認められる。まさに「貴夫人ノ観測者」(大日本氣象學會 1892b)で期待される女性観測者像といえるだろう。ただし、実際にキヨ自身が氣象学に対してどのような考えをもっていたのかは、やはりその著述に触れなければならない。「芙蓉日記」(大森 2006)をはじめ多くの著作を残した野中千代子と対照的に、キヨ自身の著作物はひとつも発見されていない。

4. 田邊タミ(たみ・民子)(生没年不詳)

田邊タミの名は『會員録』では1894(明治27)年12月のものに唯一の記載が認められる。氣象庁保存の頓野私立山口測候所の観測報告には観測者名に「田邊たみ」「田邊タミ」「T. Tanabe」等の表記で1893(明治26)年6月から1895(明治28)年7月までの間確認される。前述の栗田(1895)は、「山口測候所は助手三名(うち一名は女子)に担当せしめ令閨之を監理せり」と、夫人(頓野キヨ)以外に女性職員がいることを報告しており、これが田邊のことであろう。

田邊に関しては興味深い資料が見つかった。当時東京で発行されていた『新朝野新聞』1894(明治27)年7月18日号に「婦人天象を觀測す」と題された記事が載っている(第6図)。同記事は『内外古今逸話文庫(第十二編)』(博文館・1894年印刷刊行)という書物にもほぼそのまま転載されている。記事で紹介されているのは「田邊民子」という「三田尻(著者注:現在の防府市)の婦人」である。田邊タミと同一人物とみてよいであろう。出自に関しては「幼き時は多少の教養を受けし程の身分なりしも、打続く不運に連れては家計も漸次に零落」と述べられるのみである。家の不遇から最初使用人として頓野家に入ったが、氣象観測に熱心に打ち込む廣太郎を見て「あはれ男兒と生れかゝる面白き學びの庭の奥深く分け入らんには何程か樂しがるらん」と居ても立ってもおられず、「氣象天文の學藝女子とていかに男兒に劣る道理あらん」と

頓野夫人（頓野キヨであろう）を通じて廣太郎に自分の思いを打ち明ける。最初は廣太郎も「女の不要な企圖」と冷たくあしらっていたが、あまりの熱意に断り切れずやらせてみたところ「熱心の程見えて解する節も敏く」、いまや廣太郎も「左右の腕を得たるが如く」であり、「今や世の教育あり素養ある女にして、稍もすれば軽浮に流れ粉粧遊楽はれ事とするの時、卑賤なる下婢の去りとは賞すべく表すべきの事實ならずや」と記事は結ばれている。

この記事は頓野私立山口測候所について、細部では他の資料から判明した事実と整合しない点が少なからずあり、伝聞を元に創作された記事であることが示唆される。なにより夫人も観測者であったことが全く書かれていない。キヨという観測者がいるのに「女の仕事じゃない」とは廣太郎も言えないはずである。「天象を観測」となっているものの、測候所で天文観測が行われていたことを示す資料も見当たらない。「卑賤なる下婢」「姿の花はさまでならぬも心の美しきは丈夫をも凌ぐ」など今日では使用を憚られる女性蔑視・差別的な表現もあり、気象観測に熱心に取り組む田邊を好奇の目で扱った文章であることも否めない。しかし、最初は頓野家に使用人として入った田邊が、本人の希望から立派に気象観測を担当するようになったという話の骨格は全くの作り話とは思えない。田邊が観測者であったことは資料から確認されており、官立の測候所では女性には任官の段階から高い壁があった時代に、その実現には本人のきわめて強い熱意が必要であったと思われるからである。しかしこれはあくまで著者の心証に過ぎない。描かれている観測者像は自身の学問への興味が強調され、「貴夫人ノ観測者」（大日本気象學會 1892b）で期待されたものより踏み込んだものが感じられるが、もとより創作部分が多い記事であり、今後明らかにすべき点が多く、事実の確認にはさらなる根拠資料が必要である。

田邊の山口での観測者としての活動が確認できるのは2年あまりである。1895（明治28）年6月の頓野私立山口測候所「毎時気象観測報告」観測者名欄（第5図）を最後に、以後の田邊の消息を示す資料は見いだせない。ここでは以下の事実が確認されたことを記載しておく。田邊タミの名前の無い1896（明治29）年12月の『會員録』に、「福井縣福井測候所 森田タミ」の記載がある。同年の『會員録』には「福井縣福井測候所 森田巳貴太」の記載もある。福井測候所（現・福井地方気象台）は1897（明治30）年1月に観測を開

始したが、森田巳貴太（1863～1942以降。この表記が正規と考えられるが、「巳貴太」「己貴太」の表記も見受けられる。）は初代測候所長である（気象庁 1975）。森田は頓野（保田）廣太郎と同じく東京気象学会創立時の会員38名のひとりであり（日本気象学会 1957）、1881（明治14）年内務省地理局に雇入以来、大阪府大阪測候所（現・大阪管区気象台）、新潟県新潟測候所（現・新潟地方気象台）、奈良県八木測候所（現・奈良地方気象台）などの各所長も務め、1930（昭和5）年山形県山形測候所長（現・山形地方気象台）を最後に66歳で退官するまで50年近く気象事業に携わった。気象集誌（第一輯）には10編を超える著作があり、1917（大正6）年の大日本気象學會第30次総会において気象事業の功労者に与えられる佐野賞牌を授与され、「気象界の元老」とも呼ばれた（「大阪府立高等医学校教諭高洲謙一郎外二十三名叙位ノ件」（明治40年5月17日・国立公文書館アジア歴史資料センター）；大日本気象學會 1917, 1930；気象庁 1975。なお、森田が仙台（管区）気象台長を務めたという逢坂（1967）の記述が引用されることがあるが、森田 稔（1909～1948）との混同がある。）。ただし、森田タミ



第6図 『新朝野新聞』1904（明治27）年7月18日号3ページ（「三面記事」）「婦人天象を観測す」冒頭部分（国立国会図書館所蔵マイクロフィルム）。6～7行目に「田邊タミ」の記述がある。文語体の文章には改段、句読点はひとつもなく、見出しを除きすべての漢字にはルビが振られているが、当時の新聞紙に典型的な書式である。

が田邊タミと同一人物であると判断するのは早計である。「明治26年山口測候所気象年報」(頼野私立山口測候所 1884)には観測者名として“Mrs. T. Tanabe”の英文表記がある。さらなる調査が必要である。福井測候所の1897(明治30)年1月観測開始以降毎月の気象報告の画像は気象庁に保管されているが、その観測者の欄に「森田タミ」の名はない。1897(明治30)年12月の『會員録』にも「福井縣福井測候所 森田タミ」の記載はあるが、1898(明治31)年12月以後の『會員録』には掲載がない。以後森田タミの消息を示す資料もまた見つけられていない。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、兵庫県立図書館ふるさとひょうご情報室、神戸市文書館、山口大学図書館、山口県立山口図書館、周防大島町八幡生涯学習のむら／久賀歴史民俗資料館、華浦町歴史を学ぶ会の関係各位、石橋正好氏、古賀瑞枝氏、佐伯 隆氏、竹田義明氏(順不同)の各位には多大なご協力をいただき、また多くの貴重な資料・情報のご提供をいただいた。図の掲載について、国立国会図書館、お茶の水女子大学、筑波大学附属図書館、山口大学図書館(順不同)の各機関から許可を受けた。ここに記して感謝の意を表す。本研究はJSPS 科研費 JP17K01184の助成を受けた。

参 考 文 献

- 中央気象臺, 1897: 明治二十八年中央気象臺年報第壹編全國氣象表, 207pp.
- 中央気象臺, 1898: 地方測候所増設及ヒ廢止. 氣象集誌(第一輯), 17, 9-10.
- 大日本氣象學會, 1892a: 山口縣下第二ノ氣象熱心家. 氣象集誌(第一輯), 11, 41-42.
- 大日本氣象學會, 1892b: 貴夫人ノ觀測者. 氣象集誌(第一輯), 11, 292-293.
- 大日本氣象學會, 1898: 頼野廣太郎ノ訃. 氣象集誌(第一輯), 17, 590-592.
- 大日本氣象學會, 1917: 本會第三十次總會(雜録彙報). 氣象集誌(第一輯), 36, 219-224.
- 大日本氣象学会, 1930: 會員消息. 氣象集誌(第二輯), 8, 217-220.
- 土井彌太郎, 1957: 山口県大島郡におけるハワイ移民史(大島郡学術調査報告12). 山口大学農学部学術報告, (8), 775-847. doi: 10.11501/2338399
- 土器屋由紀子, 2018: 「野中到・千代子資料館」をホームページにオープン. 天気, 65, 366.
- 兵庫縣教育會, 1903: 教育辭令. 兵庫縣教育會報, (161), 76-78.
- 兵庫縣幼稚園連盟, 1959: 兵庫縣幼稚園史. 274pp.
- 井関九郎 撰, 1918: 現代防長人物史 地. 發展社, 640pp.
- 女子高等師範學校, 1906: 女子高等師範學校一覽自明治三十九年四月至明治四十年三月. 381.
- 梶田篤太郎, 1935: 隠れたる二大恩人 山口縣大島郡の頼野, 日野兩氏. 官約日本移民布哇渡航五十年誌, 日布時事社, p. 25, 142+10pp. doi: 10.11501/1464340.
- 気象庁 編, 1975: 気象百年史. 気象庁, 740pp+442pp(資料編).
- 神戸小學校開校三十年記念祝典會, 1915: 神戸區教育沿革史. 922pp.
- 児玉正明, 1992: 日本移民史研究序説. 溪水社, 570pp.
- 久賀町誌編集委員会, 1954: 山口県久賀町誌. 476pp.
- 久賀小學校, 1952: 學校沿革史 開校八十周年記念. 30pp.
- 久賀小學校百年史編集委員会, 1978: 久賀小學校百年史. 409pp.
- 栗田四郎, 1895: 山口測候所を訪ふ. 大日本農會報, (162), 17-19.
- MacKeown, P. K., 2008: A note on an early female meteorologist: Miss Anna Doberck. Int. J. Meteor., 33, 334-339.
- Mendenhall, T. C., 1881a: Measurements of the force of gravity at Tokio and on the summit of Fujinoyama. Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku. (University of Tokio.), (5). 17pp.
- Mendenhall, T. C., 1881b: Report on the meteorology of Tokio for the year 2540 (1880). Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku. (University of Tokio.), (7). 81pp.
- 文部省, 1890: 文部省職員録 明治二十三年七月. 137, doi:10.11501/780310.
- 永添祥多, 2006: 長州閥の教育戦略—近代日本の進学教育の黎明—. 九州大学出版会, 228pp.
- 日本地学史編纂委員会・東京地学協会, 1998: 日本地学の形成(明治25年~大正12年)〈その4〉—「日本地学史」稿抄—. 地学雑誌, 107, 735-761.
- 日本気象学会, 1957: 日本気象学会75年史. 68pp.
- 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会, 1984: お茶の水女子大学百年史. 873pp.
- 岡田正章, 穴戸健夫, 水野浩志 編, 1971: 保育に生きた人々. 風媒社, 名古屋, 391pp.
- 岡本保佐, 1892: 旅行中ノ管見. 氣象集誌(第一輯), 11, 224-229.
- 大森久雄 編, 2006: 富士案内 芙蓉日記(野中 至・野中千代子 著). 平凡社, 256pp.
- 逢坂信彦, 1967: 荒井郁之助伝: 北海道教育の先駆者. 北海タイムス社, 157pp. doi:10.11501/2983377.

- 斉藤国治, 篠沢志津代, 1969: 明治20年(1887) 8月19日の皆既日食観測についての調査—専門家の観測と一般市民の観測. 東京天文台報, 14, 423-472.
- 下関地方気象台, 1983: 山口県の気象100年. 189pp.
- 末弘錦江 編著, 1967: 防長人物百年史(再版). 山口県人会, 492pp+図版224pp.
- 竹田義明, 2007: 私立富山英語学校について—富山県初の大学受験予備校—. 北陸英学史研究, (10), 38-47,.
- 田辺 剛, 1973: 頼野山口測候所由来記. 百年史編纂ニュース, (19), 253-256. (気象庁図書館所蔵)
- 田辺 剛, 1982: 頼野廣太郎. 山口県百科事典, 山口県教育会 編, 大和書房, 577, 1001pp.
- 田中助一, 1970: 萩先賢忌辰録. 萩市仏教団, 520pp.
- 頼野私立山口測候所, 1884: 明治二十六年山口測候所気象年報. 4pp. doi:10.11501/831973.
- 海原 徹, 1965: 山口県の中等教育. 明治前期学校成立史, 本山幸彦 編, 未来社, 101-148.
- 和田雄治, 1892: 山口測候所ノ設立者. 氣象集誌(第一輯), 11, 26-30.
- 「山口大学の来た道」編集委員会, 2014: 創基200周年 山口大学の来た道 4—山口大学誕生—. 山口大学, 56pp. http://www.yamaguchi-u.ac.jp/200th/history/historyOfYU/_3455.html (2019. 6. 22閲覧).
- 山口大学図書館(企画), 2013: 創基200周年 山口大学の来た道 2—山口中学校から県内初の高校創立へ—. 山口大学, 42pp. http://www.yamaguchi-u.ac.jp/200th/history/historyOfYU/_3453.html (2019. 6. 22閲覧).
- 山口縣尋常師範學校, 1890: 山口縣尋常師範學校年報 自明治廿二年四月至明治廿三年三月. 48pp. doi: 10.11501/813400.
- 山口縣尋常師範學校, 1895: 山口縣尋常師範學校年報 自明治廿七年四月至明治廿八年三月. 52pp. doi: 10.11501/813403.
- 山口縣教育會, 1925: 山口縣教育史 下巻. 722pp+315pp(附録). doi: 10.11501/980447.
- 山口測候所, 1967: 氣象官署紹介<山口測候所>. 氣象, (119), 24.
- 山本 哲, 2018: 「野中千代子は氣象学会の会員だった?」—40年前に示された答. 天気, 65, 601-603.
- 柳川喜郎, 1984: 桜島噴火記 住民ハ理論ニ信賴セズ. 日本放送出版協会, 309pp.